

1 天草切支丹の秘宝（熊本県）

大阪の千里丘陵で万博が開かれた一九七〇（昭和四十五）年の三月、ぼくは大学を卒業して東京にある出版社に入社した。大学時代は映画制作のサークルに入っていて、その出版社を就職先に選んだのも、映像部門があったからだ。希望に反して、配属されたのは小学生向けの学習雑誌の編集部。ちょっと腐ったが、物づくりの基本は同じと納得して、とにかく「仕事のできる人間」をめざした。

担当する雑誌は、当時の文部省が告示する「学習指導要領」に準拠することを基本方針としていた。しかし、自分自身がそうであったように、子どもの関心事はもっと広い世界に及ぶと信じ、記事の題材はさまざまな分野から拾うように心がけ、それをどう枠の中に収めるか腐心した。そして、可能な限り足を使って取材し、生の体験をもとに記事を作り上げるよう努めた。読者の心を動かすには、自分がめいっばい感動したりおもしろがったりしなければならぬ。そうでなければ伝わるはずがない。

なにしろ、百万人近い読者の手に渡るのだから、気は抜けない。責任も軽くない。それだけにやりがいがあった。だから、徹夜仕事も平気だったし、月百時間を超える残業も苦にはならなかった。ただ、厳しさもあった。一字たりともまちがえることが許されないのだ。ミスが出たら発行前に倉庫で修正作業を行わなければならなかった。

気が楽だったのは、四六時中デスクに張りつづのがよしとはされず、ある程度時間を自由に使えたこと。そこで、余裕があるときには、ネタ探しのために、社内にある図書室のようなどころに足を運んだ。そこで見つけたのが『足もとにあるかもしれない宝の話』（毎日新聞社刊）だ。物語ではなく、全国各地に流布している埋蔵金伝説を集めたもので、著者は、半世紀近くにわたって伝説の調査を続けたきた畠山清行氏。

その中で、もっとも心をひかれたのが、「天草切支丹の秘宝」だった。一六三七（寛永十四）年から翌年にかけて起こった天草・島原の乱の一揆軍が、鎮圧される前に、軍用金の一部を天草島内の「三角池」に沈めて隠したというのだ。大判・小判のほかに、重さ六キロの黄金の十字架、金銀の燭台二十基、宝石をちりばめた王冠など、キリシタン関係の宝器類があったという。

スケールの点では、徳川幕府の御用金四百万両や、豊臣秀吉の黄金四億五千万両などとは比べものにならないが、この話は、ぼくに強いインパクトをあたえた。ふるさと熊本の代表的な伝説で、しかも、そんな話があるなんて、それまでまったく知らなかったからだ。大判・小判もいけれど、黄金の十字架や宝冠はもっと魅力がある。何よりも、大好きな天草が夢の財宝伝説の舞台だなんて、うれしくてたまらない。

熊本市で生まれ育ったぼくは、学生時代、夏休みに帰郷すると、必ず一度は天草に足を運んだ。ちょうど大学に入学した年、一九六六（昭和四十一）年に天草五橋が完成して、飛躍的に交通の便がよくなったこともある。透明度の高い海を泳ぎ回る色とりどりの小魚、雄大な天草灘の落日、白砂の浜に寝転がって仰ぎ見る満天の星。そういった自然の美しさもさることながら、出会う人々の心の温かさに、たとえようもない安らぎを覚えるのだった。

それまで、ぼくは天草に関して恥ずかしいほど無知で、「貧困の島」という暗いイメージしかもちあわせていなかった。確かに、天草諸島は長い間貧しい離島だった。山がちで、

耕地は狭いうえにやせている。しばしば干ばつにも見舞われる。天草・島原の乱の根本的な原因も、農民の生活の厳しさにあった。かの「からゆきさん」を多く出したのも天草である。食いつを減らすために、年端もいかぬ乙女たちが、当たり前のように遠い異国へ売られていった。ところが、行く先々で、人々の表情の明るさと、温もりに満ちた心情に接するのだ。

（人々の汗と涙を吸い過ぎるほど吸ってきたはずの天草の地に、なぜこのような心の強さ、豊かさが育まれてきたのだろうか）

何度か通っているうちに、おぼろげながらそのわけがわかってくるような気がした。

考えてみれば、十六世紀から十七世紀にかけて、キリスト教は天草の地理的条件と深い相互関係をもち、波瀾に富んだ歴史をこの土地に刻んだ。キリシタン・バテレンの入国、布教、そして逃避の地として、この辺地は十分に利用価値があった。同時に、貧困にあえぐ天草の民衆に、キリスト教は多大な精神的糧^{かて}をあたえた。乱から二世紀半を経た明治の初め、キリスト教が解禁されてみると、天草の各地でも隠れキリシタンが多数発見される。弾圧によって多少変型してはいたが、信仰の灯は永々と灯し続けられていたのだった。むしろ逆境ゆえに、天草の人々の美しい心は育まれてきたのではなからうか。

天草と埋宝伝説——。なぜかぼくには、それがびったりマッチしているように感じられ、ぜひとも財宝があつてほしいものだと思った。そのいっぽうで、伝説の信ぴょう性については懐疑的だった。天草四郎を頭首とする島原の乱の一揆軍に、軍用金なんかあつたはずがない。矛盾した二つの気持ちが交錯する。でも、結局は好奇心のほうがまさっていたようだ。

（いつか、これを調べる目的で天草に行ってみよう）

入社して四年たった一九七四（昭和四十九）年五月初旬のこと、仕事で天草を訪ねるチャンスがやってきた。雑誌の夏休み号に掲載するキャンプのロケを、陽光と自然の豊かな天草でやることになったのだ。ついでに埋宝伝説のことも取材して、記事になるようだったら何らかの形でとりあげようという計画だった。五年ぶり、伝説を知ってから初めて島へ渡ることになる。そして、まっ先に訪ねたのが、下島の苓北^{れいほく}町富岡に住む加藤健一^{かとうけんいち}さん（当時三十歳）だ。健一さんは多くの親友の兄さんで、以前、東京の中学校で保健体育の教師をしていたころには、ちよくちよく顔を合わせていた。

熊本水産高校（現在の県立苓洋^{れいよう}高校）に赴任して数年、ぜい肉がほとんどないのは相変^{あへ}わらずだが、もともと色黒だったのがさらに日焼けして、すっかり天草の人になりきった感じの健一さんは、ぼくと後輩の編集者、カメラマンを心から歓迎し、小学校の先生をしている奥さんともども、仕事に全面的に協力してくれた。そしてこのときに、伝説に関連する手がかりがつかめないものかと、相談してみたのだ。しかし、答えはそっけなかった。

「天草四郎の財宝？ 聞いたことなかよ。本当にあるとね」

頭から信じていない。

「詳しく書かれた本も出てるし、実際に探し回った人もいるみたいですよ。じゃあ、三角池という池に心当たりはありませんか」

「知らんねえ」

それは無理もないことだった。埋蔵金伝説のほとんどは、それぞれの土地に昔から伝え

られてきたものだが、この話はまるでちがう。幕末近くに、江戸のある商家で発見された文書がもとになっている。だからこそ、三角池らしい場所さえ実在すれば、一転して真実味を帯びてくる。心の片隅に、そんなかな期待はあった。

キャンプのロケを終えたあと一日だけ、ぼくはスタッフといっしょに、三角池を求めてレンタカーで島内を走り回った。聞き込みもしたが、そんな場所を知る人も、伝説を聞いたことがあるという人もいない。

(しかたがない。これで終わりだ)

そのときは正直そう思った。ところがどっこい、終わりはしなかった。それどころか、大げさにいえばぼくの人生のターニング・ポイントともいえる出来事が待ち受けていたのだ。火付け役は加藤健一さん。彼がこの話に興味をもち、調査を始めことがすべての始まりだった。

東京に帰ってからおよそ三週間後、誌面の構成が終わり、記事もあらかた書き上げて一息ついたので、ぼくは天草で世話になった礼をいうため、会社から健一さんに電話を入れた。すると、思いがけない言葉が受話器から聞こえてきた。

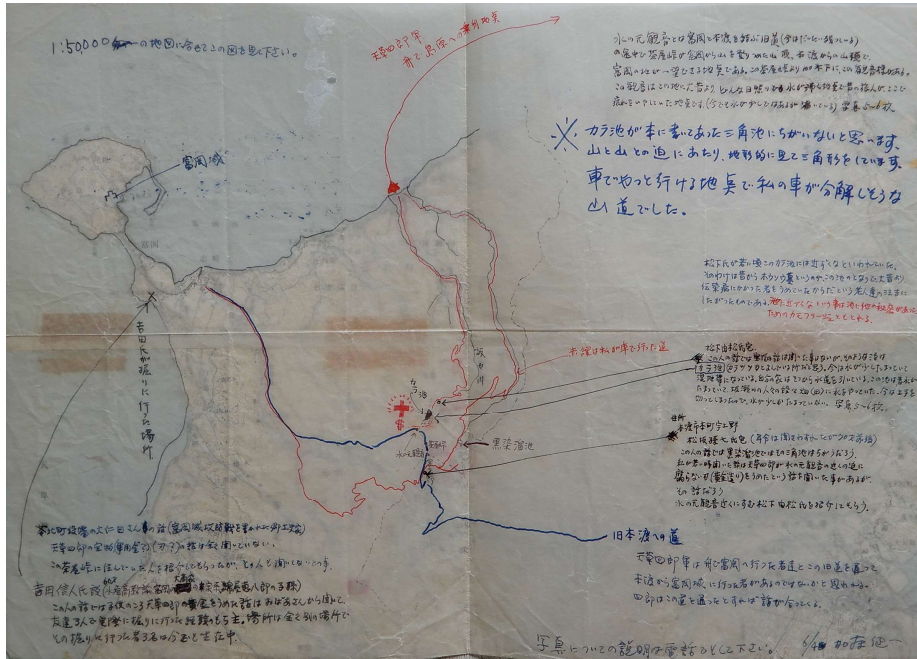
「オイ、三角池が見つかったぞ」

ぼくは半信半疑ながら、胸躍らせて次の連絡を待っていると、数日後、分厚い封書が速達で届いた。手紙といっしょに、モノクロの未現像フィルム、五万分の一の地図をトレースした紙に、細かい文字がたくさん書き込まれた、まさに宝の地図をイメージさせるものが入っていた。健一先生は毎週日曜日に、生徒を動員して山歩きや聞き込みをやってくれたようだ。その結果、有力な場所が見つかったのである。

畠山清行氏の本によると、幕末に発見された文書というのは、島原の乱から間もないころ、江戸の本所に住んでいた岳良^{がくりよう}という人物の日記だ。その中に島原の残党小山田慶信^{おやまだよしのぶ}に関することが書かれている。小山田は、かつての肥後の領主小西行長の家臣だった。一揆軍の最終目的は、主家を再興し徳川政権を打倒することとにあり、原城に立てこもることが決まったとき、彼は軍用金を守って天草に戻り、戦い敗れた後、再起のときの資金にするため、島内の三角池に沈めて隠したというのである。

その場所は「柱岳^{はしらだけ}の麓」となっているが、柱岳は、かつての天草の中心地本渡市^{ほんど}(現在は天草市)の西方一〇キロほどの地点に実在する。標高五一七メートル。ここから北方の

加藤健一氏作のこの魅惑的な“宝の地図”が、すべての始まりだった。



坂瀬川^{さかせがわ}という集落へ向かって、直線距離で二、三キロのところに茶屋峠^{ちやとうげ}という地名が見られる。健一さんが目をつけたのは、峠から少し下った谷間にある湿地帯で、土地の古老の話によると、戦前まではかなり大きな池だったそう。一帯は標高四〇〇メートル内外で島内でも高いほうだが、湧き水がある。峠からほんの五、六十メートル富岡側に下ったところにある「水の元観音」は、どんな日照りのときでも涸^{かわ}れることのない泉をまつたものだ。池も湧き水によってできたものだろう。

松坂^{まつさか}さんという七十二、三歳の老人は、次のような話を聞かせてくれたという。

「茶屋峠付近の狭間に、天草四郎が黄金の太刀を埋めたという話を、子供の時分に聞いたことがあります」

一種のおとぎ話といったニュアンスで語ってくれたそうだが、これは伝説が変形したものかもしれない。

松下由松^{まつしたよしまつ}さん（当時七十一歳）は、茶屋峠から坂瀬川の方へ三〇〇メートルほど山道を下った東南向きの斜面で、数頭の牛を飼う農業を営んでいる。戦後、大陸から引き揚げてきて、この地に入植したのだそう。もともと天草の出身だから、昔の事情にも詳しい。以後、この老人がぼくたちにとって貴重な情報源となった。

埋宝伝説については、松下老は何も知らなかったが、バナナと焼酎を手土産に訪ねた健一さんからひととおりの説明を聞くと、

「それは『カラ池』のことでしょう」

と、湿地帯のある場所を教えてくれたのである。池の水がなくなっただけカラになったから「カラ池」というのだろう。それ以前に池に名前があったかどうかは老人も知らない。写真を見ると、い草に似た水草が一面に生い茂っている。

（これは調べてみる価値があるぞ）

ぼくは、すぐに健一さんに電話をして、できるだけ早く天草へ行くと伝えた。七月中旬には休みがとれそうだったので、それまでのひと月半の間、ぼくは島原の乱に関する文献を読みあさった。

いつの時代でもそうだが、不成功に終わった反権力抗争は、後に権力者側の手で恣意的に実体が隠されてしまう場合が多い。史料がほとんど残らないことさえある。天草・島原の乱もその例にもれず、現在世に出ている文献は、幕府と、鎮圧軍に従った肥後細川藩をはじめとする近隣の藩の記録や、海外の教会史料などから、断片的に事実を拾ってまとめたものだ。

一揆軍の総大将であったといわれる天草四郎についても諸説紛々で、実像はまったくいつていいほどわかっていない。でも、ぼくにとって、それはむしろ幸いだった。なぜなら、宝探しの過程において、この歴史的大事件を、自分の都合のよいものに仕立てていくという楽しみを味わうことができたからだ。

参考資料の一つに加えたのが、聖心女子大学教授・助野健太郎氏の『島原の乱』（桜楓社）である。これは、まるでぼくの調査に間に合わせるように、この年の六月中旬に刊行されたばかりの本で、大いに勇気づけられた。

助野氏は、おもに次の三つの理由から、天草・島原の乱は、日本史上他の土一揆、農民一揆と区別して扱われなければならないと主張している。

第一に規模が大きかったことだ。鎮圧のための幕府軍の戦費が約四十万両、近隣諸藩の持ち出し分が、その半分と考えられるから、総額は約六十万両で、時価に換算すると五百億円以上（昭和四十九年当時）。これは明治十年の西南戦争の政府軍の戦費に匹敵する。

第二に政治的意味の重大さがあげられる。幕藩体制の確立をめざす徳川氏にとって、乱の勃発は大きな試練となった。將軍よりも神を尊び、封建的支配を受け入れないキリシタンを、幕府はどうしても排除する必要があった。また、西国の外様大名をいかに幕府の意のままに統率するかに、鎮圧の成否がかかっていたことにも注目しなければならない。したがって、幕府の力をもって乱を鎮圧したことは、見せしめとして大きな宣伝効果があった。同時に、キリシタン邪宗門觀を全国民にうえつけることによって、鎖国政策をおしすすめる足がかりとすることもできた。

第三の理由は、この乱が非常に特殊な、複雑な性格をもっていたということである。幕府は、表向きはあくまでキリシタンの宗門一揆として処理したが、根本的な原因は島原・天草の領主だった松倉氏（島原城主）と寺沢氏（唐津城主）の庄政だった。でたらめな検地による不当な年貢の取り立ては、農民たちを完膚なきまで苦しめた。さらに権力側は、もはや神を信じることによってしか生きることのできない彼らから、キリスト教さえもとりあげようとしたのだ。

乱は旧領主小西行長、有馬晴信の遺臣たちによって指導された。彼らは天草・島原の各地に帰農し、日常的にも農民たちの指導者の立場にあり、キリスト教の伝道者でもあった。彼らにとっても、やむにやまれぬ戦いであったにちがいない。だが、キリスト教本来の殉教の精神とはちがう方向に乱は展開していった。いわば、農民パワーの最大の結集のための統一イデオロギーとして、キリスト教は利用されたのである。

さまざまな巧妙な御膳立てがあったようだ。そしてその総仕上げとして、一揆軍のシンボルともいべき人物がまつりあげられた。小西浪人・益田甚兵衛好次の一子、四郎時貞である。

ぼくは、この第三の理由に注目した。一揆軍の核になったのは、もとからの農民ではなく、旧領主の遺臣たちだったのだ。さらに、当時はまだ反徳川の意をもつ大名が、西国には少なからずいたはずだから、その力を結集すれば、主家を再興し幕府を倒すこともけつして夢ではない。その企てが事実なら、それなりに資金の準備もしていただろうし、敗戦を予測して軍費の一部を隠すこともありえる。しかも、伝えられる宝は、金よりもキリシタン関係の宝器類が主体だったというのだ。彼らにさほど豊かな貯えがあったとは思えないだけに、かえって信びよう性があるではないか。

畠山氏の本には、伝説に関連すると思われるエピソードの一つとして、次のようなことも書かれている。

昭和の初めのこと、ある人が天草で長さ五センチほどの金の十字架を手に入れたが、表面だけが金で中身は鉄だった。ところが、これに小さな文字が彫ってあったのだ。

「さんしゃる二　こんたろす五　くさぐさのでうすのたからしづめしづむる」

後半の部分には「種々の天主の宝沈め鎮むる」という漢字があてはまることから、一部で天草キリシタンの埋宝に関係があるのではないかと騒がれた。しかし、「さんしゃる二　こんたろす五」については、謎を解いた人はいない。いずれにしろ、この謎の十字架と宝の関連については、どうもよくわからない。宝が隠された前後のいきさつを考えれば、そ

んなややこしいものを作る余裕があったとは思えないし、埋蔵地に導く手がかりとして、金をかぶせた鉄の十字架が適切なものとも考えられないからだ。ただ、長崎にあった天草の古地図に「さんしやる池」という場所がのっている、かなりデフォルメされてはいるが、茶屋峠のすぐ近くに位置しているらしい。つまり、「カラ池」の位置とほぼ一致するのだ。三角池はほんとうは「さんしやる池」というのか？ あるいは三角形の形をした池なのか？ そして、謎の十字架はたして宝のありかを解く鍵なのだろうか？

七月十九日、ぼくはひとり空路熊本へ飛び、両親がいる実家にちよつと立ち寄ったあと、バスを乗り継いで天草へ渡った。下車した富岡のバス停の近くに、天草灘を望んで頼山陽らいさんようの「雲か山か呉か越か、水天ほう沸青一髪」の詩碑が建つ。海岸は梅雨の名残の漂流物で埋め尽くされていたが、沖から水平線にかけては、すでにまばゆい真夏の海だった。

富岡の町並みは、細長く発達した砂州の上にある。その先端の陸繋島りくけいとうに、一揆軍が攻めあぐねた富岡城の跡が残る。町の中央をバス道路が走り、さらに外海（天草灘）と内海（有明海）に沿って、それぞれ新しい道ができている。前回泊まった岡野屋旅館を再び訪ねた。以後、ここがぼくたちの定宿となる。

岡野屋は明治初年創業の古い旅館で、林美美子の短編『天草灘』（昭和二十年五月刊『別冊文芸春秋』に発表）に登場する。これは、作者が長崎半島の茂木もぎから船で富岡に渡り、一泊する短い間に会おう人とのふれあいをつづった作品だが、船内の情景と岡野屋旅館での女主人とのやりとりが、雨に煙る天草のわびしいたたずまいを背景に淡々とした筆致で描かれている。美美子が泊まった部屋はそのまま残されており、玄関先には「旅にねてのびのびと見る枕かな」という、彼女の句を彫った記念の碑もある。

当時はまだ、『天草灘』に出てくる目の不自由な主婦が、この主人だった。年齢は七十歳を少し過ぎたくらいだったはずだ。驚くことに、一度来た人は声でわかるそうで、ぼくのこともちやんと覚えていてくれた。食事のときなど、手探りで部屋にやって来て、昔の話をいろいろ聞かせてくれた。

昭和三十九年に放送されたNHKの朝の連続テレビ小説『うず潮』は、美美子の生涯を描いたもので、そのロケ隊もここに宿泊している。まったくの偶然だが、岡野屋の若奥さんは、ヒロインを演じた林美智子によく似た美人。寄せ書き帳には、著名な文化人の名が多く見られる。

食事がまた豪華でおいしい。新鮮なハマチの刺身に、生ウニ、アワビ、サザエ、カニなど、地元産の海の味覚がお膳いっぱいに並ぶ。それでいて宿泊料は信じられないほど安いのだ。確か当時、一泊二食付きで二千円だったと記憶している。名の通った観光地だったから、この内容で五千円を下ることはなかっただろう。

ぼくの泊まった部屋は、穏やかな風景が広がる内海に面していた。ゆったりと日が暮れ、空の色の深まりに反比例して、しだいに明るさを増す有明海の漁火と、小さな漁船のエンジン音に、忘れかけていた安らぎの味を取り戻すことができた。そのいつぼうで、現場近くまで来ているせいか、「カラ池」の調査にかける意気込みは、ふつふつと高まっていた。

翌朝、後続部隊が車三台を連ねて到着した。加藤健一さんは熊本へ出張中で参加できなかったが、彼の弟でぼくと高校で同級だったチアキ（加藤千明君・当時二十六歳）が、仲間四名とともにやってきた。同じく高校時代からの友人であるユウちゃん（村上雄二君・

二十六歳)、遊び仲間で鮮魚店の跡取り息子のオカダ(岡田国博君・二十五歳)、福岡市の建材店に勤めるナガノ(永野義明君・二十三歳)、チアキが勤める銀行の後輩の秋田大助君(二十二歳)だ。

天気は快晴。強烈な日射しを浴びながら、三台の車に分乗して宿を出発。途中で食料と飲み物をたっぷり買い込んだ。発掘のための道具は、ショベル、鍬、鎌、ヤス。それと、東京の東村山市水道局方式の探知機。これは、長さ約三十センチの針金二本を、それぞれ三分の一ほどのところで直角に折り曲げただけのものだ。同局が、これと同じようなものを使って水道管を探知していることが、当時話題になっていたので、まねてみた。また、ほんとうは大きな白い犬を一匹連れていきかけたのだが、都合がつかなかったので、しかたなくぜんまいで動く犬を本渡のオモチャ屋で買っておいだ。このマスコットの名前は、もちろんボチ。

山道は狭く険しい。集落を通り抜けると、道は車のボンネットより高く伸びた夏草や若竹で覆われるようになった。車が入り込むことはほとんどないらしい。脱輪しないように路肩を確かめながらノロノロ走っているうちに道に迷い、ついには車を降りて、山腹にぽつんと建っていた一軒の農家に、救助を求める遭難者の体でたどり着いた。すると、幸いなことに、ここが松下由松さんの家だった。健一さんが、バナナと焼酎を手土産に訪ねた人だ。加藤先生の名を口にする、日焼けした顔に深いしわを刻んだ、いかにも人の良さそうな松下老は、「カラ池」の場所を教えてくださいな、お茶とお茶菓子まで出してくれた。

そこから茶屋峠はすぐだった。見晴らしのいい場所に立ち、谷あいを目をやると、少し平坦な草地が見える。近くの炭坑のボタを廃棄した跡だ。天草無煙炭という良質の石炭を産出していたこの炭坑は、十年以上前に閉山になっている。

ボタの先にある深い窪地、それが「カラ池」だった。ヒノキの若木に包まれて、上からその全容は確認できない。ぼくたちはゴム長靴に履き替えて、湿地帯の中に入った。水草にかくれていたが、ひんやりとしたきれいな水が二、三〇センチの深さに溜っている。湿地の中ほどまで進むと、全体をほぼ見渡すことができた。そして、水溜まりの形が見事な二等辺三角形であることを確認した。

(まちがいない、ここが三角池だ。足もとに時価数十億円の宝が埋まっている!)

だが、そう簡単に億万長者にはなれないことに、すぐ気づかされた。水溜まりを、いったいどうやって掘ればいいのか。ぼくは途方に暮れて、しばらく立ちつくしてしまった。とりあえず、発掘するポイントについては、みんなの考えが一致した。かすかに残る昔の道の跡が「カラ池」を半周している。宝が隠されたのは、人目につきにくいところ、つまり、道から最も遠いところではないか。

水草がじゃまになるので、幅五メートル、奥行き一メートルの範囲で設定した第一ポイントの水草を、まず鎌で刈り取る。次に、水中にはびこる根を鍬で掘り起こし、準備をととのえる。それから、堆積したドロの中にヤスを突きさし、異物に当たればそこをショベルで掘るという方法をとった。

炎天下におよそ三時間、懸命の発掘作業が続いた。「おっ!」とか「やっ!」とかいう声が、何度谷間にこだましたことか。だが、ドロの中から出てくるのは、朽ちた木片か石ころばかり。

作業中、松下老が現場に顔を見せた。

「なんか出るとよかですなあ」

満面に笑みをたたえてそっくり、こんな話も聞かせてくれた。

「私が子どものころにや、年寄りからこのへんに近づいちゃならんていわれよったですたい。昔、その脇の山に、『ホウソウ墓』ちゅうて、疫病で死んだ人間ば捨てよった場所のあったですもん」

気味の悪い話だ。ところが、東京歯科大学にまだ在学中のユウちゃんが、とんでもないことをいいだす。

「そんなら、人骨ば掘ったほうが手っ取り早いかもしれんぞ。完全な形の頭蓋骨なら、大学の研究室に六、七万で売れるけんね」

もちろん、だれもユウちゃんの話にのろうとはしない。

水中に沈めてある塩化ビニールのパイプがじゃまになっていたので、何のためのものか松下老にたずねてみた。

「うちの水道ですたい。牛の飲み水にしようと思うて引いたですばってん、ここの水は金気かなけが多して、牛が飲まんですもん。金魚も死にますもん」

なるほど、さっきから水中にさび色の水あかが浮いているのが気にかかっていたのだ。掘り出した石ころは、ほとんどが赤茶けた砂岩だった。底の岩盤全体が鉄分を含んでいるのか、それとも――。

最後に松下老は、ひとこと注意をあたえて去った。

「ヒラクチに気イつけなっせ」

マムシのことである。「ホウソウ墓」に湿地の金気、毒ヘビ。なんだか、ありふれてはいるが、ちょっと背筋が寒くなる冒険映画の世界へ誘い込まれたような気分だ。でも、その程度のことではめげるわけにはいかない。以後、マムシなんて一度も目にすることはなかったし、もちろんドロクロも出てきはしなかった。朴訥のかたまりのような松下老のことだから、まさか雰囲気盛り上げるために、ありもしないことを口走ったわけではないはずだ。

ついにこの日は何も発見できなかった。東村山市水道局方式のコックリさんもダメ、ボチもワンともいわない。一つだけ収穫があったとすれば、ヤスを突きさすと、どこでもほぼメートルでかたい岩盤に当たり、堆積したドロの深さがわかったことぐらい。それにしても作業はきつい。けっして広い場所ではないが、調べつくすには相当の時間と労力が必要だろう。超快楽主義者のオカダにしてみれば、頭に描いていた宝探しのイメージと現実との間に、とてつもないギャップがあったようだ。

「天草で宝探しするて聞いて、カッコよかばいて思うてついできたら、全然ちがうもん。たんぼのごたるところで、ドロまみれになって、しかも年上の人のいうなりに穴ば掘る姿

水草を刈り取り、ドロ水の中を探る。



は、見苦しゅうして、女の子には見せられんたい」

オカダのコメントはビントはずれもいいところだが、やり方が原始的すぎるのは確かだ。もっと効率のいい方法を考えなければならぬ。そこでぼくが発案したのは、科学的な探査機の導入だった。

いまは宝探しにも使える金属探知機が、そこそこの値段で市販されていて、わりあい簡単に手に入るが、昭和四十九年当時はそうもいかなかった。

（安くて役に立つ探知機がないものだろうか）

ぼくは二、三の計測器メーカーに当たってみた。できれば貴金属に反応するものがいい。だが、そんなものはどこにもなかった。結局、購入したのは小型の磁気式鉄片探知機で、値段は四万八千円。空港で所持品のチェックに使われているのは見かけるが、そのほか、洋服屋さんが仕上げの段階で、服の中に取残した針を探し出したり、製材所で、原木を挽いて板にする際に、釘などが刺さっていないかを調べるなどの用途があるらしい。けっして宝探し向きではないが、隠されているのは金銀だけとは限らない。刀剣類が混じっているかもしれないし、容器に鉄が使われている可能性もある。

探知機を買うと早く試してみたくて、一回目の発掘からひと月もたない八月の中旬に、またまた天草の土を踏んでいた。今度は、やはり高校の同級生で全日空勤務のコゾノイ（古園井俊夫君・当時二十七歳）が東京から同行する。チアキラ一回目のメンバーは、仕事の都合で参加できなかった。

現場は二日間だけ。ところが、運悪く一日目に中型の台風が接近した。雨はそれほどでもなかったが、強風の中をショベルをかついで山へ向かうぼくたちを、旅館の人はあきれ顔で見送っていた。

前回掘り起こした部分はそっくりそのままの状態で、ひと月の間にだれかが入り込んだ形跡はまったく認められなかった。「カラ池」は、二等辺三角形の底辺にあたる部分から、少しずつつ水が流れ出している。宝がそのあたりまで流されているかもしれないと考え、まず底辺付近を集中的に調べることにした。探知機をビニール袋に入れて、泥水の中を探る。反応はない。二メートルほどの棒をそこらじゅうに突きさしてもみたが、異物がある感じはなかった。

最初の成果らしいものがあったのは、二日目の午前中のことだ。三角形の頂点付近の土中から、多量の木

水中で金属探知機のようなオモチャを探索する筆者（当時26歳）



オカダは必死で土中を探しながらブツブツ言っている



片が出た。かなり腐食しているが、一部に鉄サビのようなものが付着している。探知機を近づけると、かすかな反応があった。

「宝の箱だぞ、これは！」

二人とも急に元気づき、その一帯を掘りまくったのだが、湧き出る水のため思うように作業が進まず、結局、そのほかに期待するような金属類は何も発見できなかった。

二回目の発掘を終えて帰京したところか

ら、ぼくたちの宝探しはだんだんに知られるようになった。別に秘密にするつもりはなく、むしろ親しい人には「財宝発見は近い」とホラを吹きまくっていたので、うわさが広まったのだ。

頭ごなしに「馬鹿げている」という人はいなかった。ただ、数十億円の宝がすでに手にあるかのようなぼくの語り口に、多くは「まさか」といった顔をした。それでも、心の奥に（ひよっとしたら）という気持ちがあるのがわかるからおもしろい。最後には必ずこ

ういう。

「小判一枚くらい分けてちょうだい」
一回目の発掘前夜の話だが、熊本の連中が打ち合わせを兼ねてチアキの家に泊まり込んだとき、図々しさでは人後に落ちないオカダが、チアキのお母さんに弁当を作ってくれるよう頼んだ。「チクワの煮たのば入れて」と、おかずの指定までして。

「せからしか（うるさい）。いい歳して宝探しなんかに行く人たちに、だれが弁当まで持たせるもんですか」

お母さんはそう突っぱねたものの、翌朝にはチクワの煮付けをはじめ、ごちそうのいっぱい詰まった重箱を用意してくれていた。そして、出がけに念をおすことも忘れなかった。「いいかい、あたしはちゃんとお弁当作ったけんね」

このお母さんは、後に熊本市の婦人会会長を務められるが、当時も確か副会長だったと記憶している。戦後の地域婦人の生活の向上と権利の擁護のために活動を続けてこられた方である。市の教育委員にもなり、叙勲を受けて天皇陛下主催の園遊会に招かれ、しかも、陛下からお言葉をかけられたこともある。そんなエライ方に「あたしは弁当作ったけんね」といわれたら、小判一枚くらいですむはずがない。

また、大分市内のとある小料理屋の壁には、長い間「宝が出たら金のブラジャーをあげます」と書いた箸袋が、薄汚れたまま貼ってあった。当時、チアキが女将に冗談口をたたいて、証文として書かされたものだ。だいぶたってから、チアキがそれに気がつき、

「あら、まだ貼ってあるね」

というと、女将はこう答えたそうだ。

「ひよっとしたらと思うて、おいそれと捨てきらんもん」

傍観者からはよく、「夢があつていいですねえ」といわれる。確かに、それだけのことなのかもしれない。「おもしろい遊びじゃないか」「旅の一変形だね」という評価も当たって

鉄サビが付着した木片。もしかしたら宝の箱の一部か？



いるように思える。でも、ぼく自身は他人が考える以上に大まじめだった。話を聞いただけでは、遊び以外の何ものでもないように思われるかもしれないが、せっかくやるからには、できるだけおもしろくしなきゃ損だから、いろいろ工夫しているのがそう見えるのであって、目的はあくまで財宝を掘り当てること。

「それならば、ブルドーザかショベルカーを使えば早いじゃないか」

と、ありがたい提案をしてくれる人もいた。当時、もしぼくにそれだけの資金があつて、現場が重機を入れられるような場所だったなら、あるいは提案を受け入れていたかもしれない。だが、どっちみちそれは無理なことだったし、宝探しの方法として（なんかちがうんじゃないかな）という思いがあつた。そして、経験を積むにしたがつて、自分たちのやり方が最善であることを確信するようになっていく。

この世界には必ずリスクがつきものである。ギャンブルと同じように、宝探しもリスクがあつてこそスリルが味わえ、ターゲットを手中に収めたときの喜びは大きいものになるはずだ。問題はそのリスクの程度で、自分の責任において背負えるリスクだったらいいが、ある一線を越えるところでもないことになってしまう。世の中には、埋蔵金の発掘で金を使い果たし、大きな借金まで抱え込んだ人もいると聞いていた。（けっこうコワイ世界なんだ）という意識は最初からあり、危険信号がいつも頭の片隅でチカチカしていた。

ただ、仲間はそれぞれ少しずつちがった気持ちで天草に通っていた。たとえば、コゾノイの場合は、

「現場に立つて、ぼくはまず小山田慶信の心理をよむ。彼がいったいどんな思いを込めて宝を隠したか。そこに、三百数十年を隔てた人と人との、ある種のコミュニケーションが成立すると思う。シヨベルを土中に突き立てるに至る心理的過程を、ぼくはより充実したものにしたい」

彼は後に、全日空の社内報（一九七五年三月号）の「スカイ・ラウンジ」というエッセイ欄に、こんなことを書いた。

「この遊びに参加する以上、シラケた気持ちを抱かない。またそうでないと、この種の遊びを楽しむことはできないのではないだろうか。私たちは言葉で確かめ合ったわけではないが、このことは默契の形で了解しているのである。この虚構の世界に積極性を付与し、真面目な、真剣といってもよい想念を投げ込むことによって、遊びは成立する」

また、同年三月十一日発行の「ユース・ホステルしんぶん」にも、次のような文章を寄稿している。

「第三者から観て、私達が不確かな事象に対し真剣になればなるほど、おかしさ、滑稽さが増すのは否めないが、私達はゲームと規定した。当事者は演技する。それを眺める観客が、この約束事を認知する限りについて、いかなる日常的価値基準からも無縁となり、完璧に仕上がるのである。伝説実証の成否が問題なのではない。イマジネーションを楽しむ、シュピール（遊び・独語）の世界を満喫する、想像を楽しむだけで十分なのである」

彼が書いているとおり、ぼくたちはこれを「遊び」と割り切つてやろうなんて、口にしたことは一度もなかった。回を重ねるうちに、そういう取り組み姿勢が自然と身についていたのだ。実は、これがとてつもなく重要であることを、後に認識させられる。忘れてならないのは、自分たちが虚構と現実の狭間に身も心も置いているということだった。気持ちの振れ幅には個人差もあり、時と場合によってもちがう。コゾノイは、どちらかといえ

ば、現実の世界から虚構の世界に片足だけ突っ込んで楽しんでいるタイプ。ぼくのほうは、どつぷりと虚構の沼につかり、水面から鼻だけ出して、辛うじて現実の空気を吸っているといったところ。第三者は夢とかロマンといった言葉を気軽に口にするが、そのほんとうの意味は、ある一線を越えるか越えないかのギリギリのところ、楽しさだけでなく苦しさや危うさも味わってみないと、わからないのではないかと思う。

コゾノイとぼくとの会話の中に、よくハインリヒ・シュリーマンやハワード・カーターの名前が出た。二人は見事に埋もれた歴史を解明し、財宝を発見したが、それには長い時間とたいへんな労力を要した。むしろ、求めるものが不確かであったからこそ、探求心がかき立てられ、苦勞が多かったからこそ、大いなる達成感を味わえたはずである。ぼくたちの宝探しは、シュリーマンやカーターに通じるものがあつた。「カラ池」は、トロイアの遺跡が現れた「ヒツサルリクの丘」であり、ツタンカーメンの黄金のマスクが出てきた「王家の谷」だった。

年が明けた一九七五（昭和五十）年一月一日の夜、三回目の発掘調査隊が、富岡の岡野屋旅館に結集した。東京からコゾノイと、ぼくの会社の先輩である阿波田時彦さん（当時三十六歳）夫妻が同行。読売新聞大阪本社の佐藤崇雄記者が、取材目的で参加した。佐藤記者は、谷口正彦さんからぼくたちのことを聞き、新年向きのネタだということで、同行を希望したのだ。谷口さんはテレビ局を辞めたあと、「雪男探検隊」の隊長として、ヒマラヤに二度も乗り込んだ人物で、仕事を通じて知り合い、雪男探しとぼくの宝探しには共通点が多いことから意気投合し、そのころ何度か顔を合わせていた。

新聞といえば、コゾノイの知人で、羽田空港記者クラブの毎日新聞篠田豊記者が、ぼくたちの出発に合わせ、激励の意を込めて「雑記帳」というコラムで取り上げてくれたのが、十二月三十一日のことだった。また、それを読んだFM東京のプロデューサーから熊本へ連絡が入り、ぼくは一月二日の朝、現地から電話インタビューに答えてしゃべることになった。思いがけないマスコミへの登場である。

大晦日に降り出した雨も元日の午後には上がり、二日は朝から快晴だった。金属探知機のほかに、今度は発電機と排水ポンプも持ち込んだ。熊本市で建設会社をやっている知人から、正月は使わないだろうと、無料で借りたのだ。「三角池」（このころからそう呼んでいた）の水草は枯れ、水はさすがに冷たかった。

前回、多量の木片が出た地点を、ポンプで排水しながら徹底的に掘ることにした。発電機のエンジン音が静寂を破る。しかし、この機械も思いどおりには働いてくれない。水草の茎や根が取水口に詰まり、それを取り除いている間に、掘った穴がすぐ水びたしになってしまう。作業時間の多くは機械との格闘に費やし、しまいには目的が何だかわからなくなってしまうありさまだ。とうとう佐藤記者も、黙って見ているわけにはいけなくなり、シヨベルを手に応援をかってでた。

昼、ボタの窪地に車座になって、岡野屋旅館の若奥さんが心をこめて作ってくれたおにぎりをほおぼり、携帯用ガスコンロで沸かした熱いコーヒーをすすった。胃袋が落ち着くと、枯れ草の上に大の字になって昼寝をした。空はあくまで青く、とても冬とは思えない暖かい陽光を体いっぱい浴びる。聞こえるのは、枯れ草がそよぐ音と小鳥のさえずりぐらい。別天地だった。

阿波田さんがつぶやいた。

「こんなぜいたくな正月は初めてだな。温泉なんかに行ったら人だらけだし、家にいたらくだらなテレビを見てしまう。自然に包まれて、いまは気の遠くなるような宝の夢をみているんだから」

そのとおりとばかり、佐藤記者がうなずく。

「ぼくはまた夏にでも家族連れで来たいな。すっかり気に入っちゃったよ、ここが」

午後の作業中に、松下由松老が現れた。

「また来らしたとですか」

綿入れのちゃんちゃんこを羽織ったその肩には、二またに分かれた細い木の枝をかついでいる。枝の中ほどには紅白のまだらの椿の花が一輪、細ひもで結わえつけられていて、先端にはとりもちがくつついていた。孫にせがまれて、メジロ獲りに来た帰りだという。もういっぽうの手にぶら下げた竹かごには、おとりのメジロが一羽だけ。獲物はなかったようだ。その出で立ちに、ぼくたちの心がふつとなごんだ。

「何か出るとよかですな」

相変わらずのしわ深い笑顔で松下老は励ましてくれ、飄々と立ち去った。

「あのオジイちゃん、ここを自分で掘ってみようなんて気は起こさないのかな」

佐藤記者が疑問を口にした。仲間うちでも、同じことが何度か話題に出ていた。本人がその気になれば、遠くから通ってくるぼくたちに比べてはるかに有利だ。でも、それは百パーセントありえないことだと、ぼくは思っていた。もしかしたら遠慮も少しはあったのかもしれないが、それよりも、オジイちゃんにとつてあまりにも身近なこの場所と、夢のような宝の話との間にギャップがありすぎた。例えるならば、芝居の舞台に似ている。板の上にセットが組まれ、照明がつき、演技者が動き始めると、そこは華やかで心浮き立つ空間となって、それこそかぶりつきで観たくもなるが、ふだんは冷たくて無機質な板があるだけ。わざわざのぼつてみる気にもならない。もちろん聞いてみたことはないが、オジイちゃんの頭の中で、ここはきつとそんな存在にちがいないのだ。

排水に手こずりながら、夕方までになんとか穴は底の岩盤に到達した。だが、目的のものが出てこない。

三日の朝、正月を熊本の実家で迎えたチアキ、ユウちゃん、ナガノの三人が、トソ機嫌で到着。人手が増えたので、探索の範囲を広げることにする。間もなく、ぼくが操作していた探知機が、突然ピーピー鳴り出した。

「ここだ。掘ってみて」

コゾノイがショベルを振るう。(ガチッ!) 確かに手応えがあった。一同かたずをのむ。だが、出てきたのはサビついたワイヤの切れっぱし。一瞬静まり返ったあと、だれからともなく笑いが起こった。周囲には見事な杉林があるから、伐採した下枝をまとめるのに使

メジロ獲りの帰りに現場を訪れた松下老（手前）



ったワイヤの残りだろう。

次に、探知機は長さ五センチ、幅三センチほどの、砲弾のかけらのような鉄片をとらえた。正体不明のその物体を、ぼくはいじくり回し臭いをかぐ。三百四十年前の寛永年間の香りを求めたのだが、残念ながらそれをかぎとることはできなかった。ただ、その鉄片だけは貴重な資料として、小判が二、三千枚はゆうに入る布製の大きな「発掘品収納袋」に入れて持ち帰ることにした。

湿地をくまなく探査するには、まだまだ時間がかかる。撤収のときに、今度はゴールドエンウィーク、できるだけ人を集めようという相談がまとまった。

熊本への帰り道、ぼくたちは本渡市の中心街にある鶴田民芸品店に立ち寄った。前年の五月、加藤健一さんのすすめでぼくはここをのぞき、錫製の聖杯を買い求めている。そのときのことを、主人も奥さんも覚えていてくれた。主人は五十歳前後とみられる人で、黒縁の丸い眼鏡をかけ、小柄で痩せていた。民芸品、骨董ブームの当時、大半の店が品不足気味らしかったが、ここはちがった。間口二間ほどの店先から品物があふれ出していた。ただ、キリシタン関係の品物はもう貴重品の部類に入ると聞かされた。

恰幅のいい奥さん秘蔵の品も見せてもらった。くし、かんざしなど女性用装身具のコレクションである。

「華道の安達瞳子^{あだちとうこ}さんが、この手の品物の収集家として有名らしくですばってん、私の持っている物もけっしてひけはとらんと思いますよ」

そう自慢するだけあって、べっ甲、あわび、さんごなど高価な素材をふんだんに使ったそれらの品は、目を見張るばかりだった。中には、からゆきさん持ち帰りのものもあるとか。

実は、ぼくがこの店に寄ったのは、ちょっととしたいはずらを思いついたからである。それらしき物を買って求めて、東京で期待して待っている友人たちに「これが出てきたよ」と、おどかしてやろうと思ったのだ。

主人との話がはずみ、ぼくは宝探しのことを打ち明けた。店を訪ねたわけも。そのお返しというわけではないだろうが、主人の口から思わぬ情報を聞き出すことができた。この人は、「天草新聞」という地元ミニコミ紙の記者でもあった。

「いやあ、おもしろかですなあ。そぎゃんこつをしよらすとですか。てっきりあんたがたは、電話工事の人たちと思いましたたい」

ぼくは（どうして？）と首をひねったが、すぐに思い当たった。富岡と中国本土との間に、KDDが海底ケーブルを敷設する工事をしている最中だったのだ。

「実は、天草四郎の宝については私もいろいろ調べましたですたい。発掘調査に参加したこともありますよ」

ぼくはしめたとばかり、その先を促した。

「十年ほど前、祈禱師を連れて湯島^{ゆしま}に渡った連中がおりまして、私もついて行きました。なんか怪しげなお祈りをしましたけど、山の頂上付近に何か埋まっとうというお告げが出たもんで、みんなで行って見たわけです。したら穴が見つかったとです。一人がその中に入ってみたところが、急にぶったおれましてな。あわてて引き上げたらもう瀕死の状態でした。たたりだなどという者もおりましたが、どうやらその穴は、昔、武器を隠した穴だったらしいですたい。火薬か何かがガス化して、それに中毒したとじゃなかですかね」

湯島は、島原半島と天草の大矢野島（一揆蜂起の地）とのちょうどまん中に位置する小島で、遠くからは平べったい等脚台形に見える。いまは年中釣り客でにぎわい、人口（三百名）より多い野良猫が住む「猫の島」としても名高い。一揆を起す前に、天草方と島原方の浪人たちが秘密の会合をもつ場所として利用した。そのことから、別名「談合島」ともよばれる。埋宝伝説がどこから生まれたのか不明だが、乱にゆかりのある地でもあるし、「三角池」の伝説とは別ものだろう。

下島の福連木の「ひょうたん池」というところにも宝が沈んでいると聞き、探しに行っただが、そんな池は見つからなかったそうさ。

「天草はあなた、宝の島ですよ！」

しゃべればしゃべるほど、明らかに主人の精神状態はハイになっていった。そんな話をまじめに聞いてくれる人が、それまでいなかったのかもしれない。そして、とっておきのマリア観音像を格安の値段で譲ってくれた。高さ十四センチの木像で、黒い漆の上に金箔がところどころ残っている。腕の部分がほとんどなくなっているのは、信者が病気のときに薬がわりに削って飲んだからなのだそうです。

このマリア観音像は、友人数人を「ええっ！」と驚かせたあと、いまでも自宅の仏壇の奥に鎮座している。

東京に帰り、日常生活に戻って数日後、読売新聞大阪本社版が佐藤記者から送られてきた。「生きる S 50（昭和50年）」というシリーズの一つに取り上げられたもので、「天草の秘宝はどこだ 4人氣まま探検」と題し、半七段のスペースに写真一枚を使い、実にさわやかな文章でぼくたちの行動がありのままに書かれていた。

四回目の調査は、その年のゴールデンウィークに実現した。期待していた以上に人手が集まり、五月三日の夕方、岡野屋旅館には総勢二十二名の仲間が集合していた。内訳は女性六名、男性十六名。東京からぼくを含めて七名、大分からチアキ以下五名、熊本から六名、福岡、鹿児島、そして長野県塩尻市から各一名。それに現地の加藤健一さんだ。さらに、「夕刊フジ」の太田英昭記者（後にフジテレビ副社長、産経新聞社会長などを歴任し、現在は産経新聞社顧問）と朝日新聞熊本支局の本田優記者が加わった。

チアキの小学校以来の友人で、学習院大学でも同期生だった富高久紀君は、鹿児島で屋久杉を材料にした高級家具の製造をやっている。彼だけは「宝探し野次馬観光ツアー」と自称し、見学のみでドロにまみれるつもりは毛頭なかった。対照的に、塩尻から来た岩本竹敏君は、

「初月給の半分を旅費につぎ込んでいるんだから、宝が出てもらわなくては困る」

と、勇み立っている。彼は広島県竹原市の出身で、コゾノイと同じアパートの住人だったが、この年の春、早稲田大学を卒業して昭和電工に入社した。新人社員だから、有給休暇をとるのも気がひけたと、短く刈りこんだ頭をかきかき、人なつっこい笑顔を向けた。

初対面同士でもたちまちうちとけ、六畳間を三間ぶち抜いてつくった宴会場は、派手な前祝いで沸きに沸いた。ほかに客はなく、旅館の人もしどろり騒ぎに目をつぶってくれた。おばあちゃんは相変わらず元気で、廊下を伝い歩きしてきて話をしてくれる。

「いつも、あなた方が書いてくださる寄せ書き帳を、あとで家のものに読んでもらうのを楽しみにします。おもしろかことがいっぱい書いてあります。ほんとに、宝が見つかる

とよかです」

岡野屋の玄関先に林芙美子の句碑があることは前に述べた。それだけではない。中庭には上林^{かんじやうしあかつき}暁の文学碑がある。上林も、第五高等学校時代に富岡まで旅行した体験を『天草土産』という小品にまとめている。

また、内海に面した旅館の裏手には、鮫島^{さめしまじやうかい}十内という人物の顕彰碑が建つ。十内はおばあちゃんの祖父にあたる人で、一八九三（明治二十六）年のシカゴの万国博覧会に、新しい工夫を凝らした漁網を出展し、金杯を受賞している。イワシ漁に使う「八田^{はた}網」とよばれるもので、現在のきんちゃく網の原型だという。碑だけでなく、十内の功績をたたえる歌まで作ってあって、テープを何度も聞かされた。おかげで、その中の、

〈オトコ、鮫島十内イ見たか〉

というサビの部分は、ぼくたちの脳に刷り込まれていて、発掘作業のときに自然に口をついて出るようになっていた。

三つの記念碑は、すべておばあちゃんが自分の小遣いで建てたもの。そして、ぼくたちがめでたく天草四郎の財宝を発見したら、岡野屋に四つめのひとときわ立派な碑が建つことになっていた。もちろん、その費用を宝探しの仲間が負担することに、だれも異存はなかった。

前祝いの宴が終わりに近づいたころ、二人の新聞記者のために、隊の正式名称を「第四次天草キリシタン埋蔵金発掘調査隊」とすることが決まった。なおいつそうムードを盛り上げる意味で、ぼくはとっておきの新説を発表した。

「財宝の中に、世界最大の金貨、天正長大判が含まれているかもしれない」
根拠は次のとおりだ。

豊臣秀吉は、金銀のもつ威力を最大限に利用したことで知られる。手柄を立てた家来に惜しげもなく金銀を与え、彼らの戦鬪意欲と忠誠心をあおったのである。一五八九（天正十七）年には、京都聚楽第^{じやらくてい}で空前の「金賦^{かねくは}り」を行っている。『多聞院日記^{たもんいん}』によると、このとき一族、公家、諸將に与えた金銀は総額三十六万両にものぼった。一説に、これが新鑄した天正長大判の披露を兼ねたものだったという。このビッグイベントを頂点として、秀吉は何度か金銀の大盤振舞を行ったが、「三角池」の宝が小西行長の遺産の一部だとすれば、その中に秀吉ゆかりの金銀が含まれていると考えてもおかしくない。行長は、加藤清正と並び称せられる、秀吉麾下の武将の一人だったのだから。

あいにくの天気だった。一日目は終日小雨もようで、異常に冷えこんだ。しかし、隊員の意気込みはすごい。「金」とか、なぜか「誠」といった文字をあしらったハチマキをしめ、それぞれ自分の縄張りを決めて掘りまくる。方法はこれまでと同じで、土中に突きさす棒の感触だけが頼りだ。経験を積んだコゾノイやぼくは、棒の先に触れたものが石なのか木片なのか、だいたいわかるようになっていた。だれが名づけたか、この棒をぼくたちは「オカルト棒」とよんだ。

相変わらず、棒に石や木片以外のものは触れない。二日目も同じ。でも、隊員の顔には笑みがあふれていた。みんな、ふだんは肉体労働とは縁がない。ぼく自身がそうだったように、土を掘る作業の中に、人間本来の冒険心や探求心を満たすものがあることを気づかされたはずだ。その魅力にすっかりとりつかれてしまったのが、東京から来たイラストレ

ーターの白井正樹さん（当時三十二歳）である。

「一度でいいから、こんなことをやってみたかったですよ。すごく楽しかった。今回はダメだったけど、私はまたチャレンジしますよ」

五回目の発掘は、その白井さんがお膳立てをした。「夕刊フジ」に二日連続で見開きの記事が載ったこともあり、今度は、フジテレビの「小川宏ショー」で紹介されるといふのだ。

「三角池」一帯は荅北町の町有地である。全国ネットのテレビに、しかも視聴率の高い人気番組に出るとなると、町に黙っているわけにはいかない。そこで、現地入りした八月の末、フジテレビの広瀬英明ディレクターらとともに、まずは役場を訪ねた。

作家の森敦さんと遠縁で幼なじみの森実町長以下、役場のお歴々は、ぼくたちがこれまで無断で町有地に入り込んでいたことをとがめるどころか、初めて耳にする埋宝伝説にいたく感動していた。さあ、それから町をあげての大騒ぎである。

発掘当日の朝、ぼくたちが現場に入り準備をしていると、まもなく黒塗りの公用車で町長が到着した。なんと、黒のダブルのスーツにゴム長という出で立ち。続いてパトカーで警察署長が現れた。めでたく財宝が出てきたら、あとは警察におまかせという意志表示だろうか。

炎天下に、発掘とフィルムの撮影が並行して行われた。後にフジテレビの看板スポーツアナとなるレポーターの松倉悦郎さん（現在は姫路市の善教寺僧侶）は、雰囲気を出すために黒い紋付袴に身を包み、流れ出る汗をふきふきインタビューに走り回る。まずは町長から。

「宝の話は初めて聞きましたが、荒唐無稽ではないと思いますよ。天草四郎軍は、富岡城を攻めるときにその街道を通つとりますから、この池を知っておったでしょうし、宝を隠すにはもってこいの場所ですよ、ここは」

うまく口を合わせてくれる。また、宝が出たらどうするかという質問には、こう答えた。

「町が半分もらえるそうですが、そういういわれの品物だから、何か文化的な事業にでも使いますかねえ。ハッハッハッ」

町長の高笑いにつられて、見物人の間にも笑いが起こった。おもしろい受け答えをしていたのは町長だけではない。地元の古老の代表として呼ばれた錦戸さんは、「財宝はあると思いますか」との問いに、

「さあ、海のものとも山のものとも、ここは山ですが」

などとジョークを飛ばしていた。

撮影の途中、ふとぼくの耳に役場の人の話し声が入ってきた。

「水道の探知機ば使うたらどうだろうか」

探知機という言葉に敏感になっているぼくは、驚いてたずねた。

「何ですか、それは？」

「はい。水道管を探すための金属探知機が役場にありますたい」

「というと、先に円盤のついた、電気掃除機みたいな」

「はいはい、そうです」

（意外なところに意外なものがあるもんだな）

ぼくが感心していると、背後から声がとんできた。

「ああ、あれば持ってくるよかたい」

町長だった。早速、阿波田さんが役場の人に同行して車でとりに行く。しばらく作業を中断。ワクワクしながら待っていると、やがて身ぶるいするほど本格的な探知機が到着した。おもに白井さんが操作したが、絵にもなるし、テレビにとってはこの上ない小道具である。

期待のまなざしを集める中で、探知機は二度うなった。だが、土中からは何も出ず、おかしいことに、掘り起こしたあとに再び探知機を近づけると、反応を示さなくなる。たぶん、一カ所にたまっていた土中の鉄分が、たまたま反応しただけなのだろう。

排水ポンプも役に立たない、金属探知機も信頼できない。ぼくは完全に行きづまってしまった。次回から、どうやって仲間に参加を呼びかけよう。何らかの新たな方策を提示しないとのつてこない。

昭和五十年の八月から五十一年いっぱい、いわば冷却期間となった。ちょうどこの間に、ぼくの身の上に大きな変化があった。結婚したのが二十八歳になってまもない五十年の十月で、翌年の七月には長女が生まれた。周囲の目は、身を固めて子どもまでできたのだから、もう夢みたいなことを考えるのはやめたのだろうと見ていたようだ。ところがさにあらず、熱はけっして冷めてはいなかった。ある人物との出会いがきっかけとなって、また血が沸き立ってきたのである。

五十二年の正月休暇を、ぼくはめずらしく、新しい家族とともに熊本の実家でのんびり過ごしていた。そこへ、大分のチアキから電話が入った。

彼はもともと銀行員らしからぬタイプだが、それに加えてこの発掘隊に参加するなど奇行が目立つので、ユニークな存在として職場でも一目置かれている。元日に彼は上司から呼び出しを受けた。おもしろい人物がいるからぜひ引き合わせたいというのだ。先に上司宅に着いたチアキが待っている、一陣の風とともに（この表現が最も適切であるそうだ）赤ら顔の大柄な男が現れた。カトリック教会のセサール・フラガ神父である。スペインのガリシア地方の生まれで、日本に来てすでに二十五年、当時四十八歳だった。黒マントをなびかせ、旧式のオートバイでやってきた。チアキが驚いたのは、ゴーグルにワイパーがついていたことだ。超小型のモーターで動くワイパーで、左右に一つずつ。しかもそれが手作りなのである。後日、チアキは神父に誘われて別府湾に釣りに出かけたりするのだが、このとき乗ったモーターボートもお手製だった。おそろしく手先が器用な人らしい。

その人の名前を聞いたとき、ぼくは何年か前に読んだ週刊誌の記事を思い出した。スペイン人の神父が、群馬県の赤城山で、徳川幕府御用金を探しているという記事だったはずだ。ぼくがそのことを確認すると、チアキはそのとおりだと答えた。

フラガ神父がいつごろから日本の埋蔵金に興味をもったのかは知らない。いずれにしろ、我が国で最も有名な埋蔵金伝説に目をつけたのは当然のことといえるだろう。実は、このころ彼は、御用金四百万両の埋蔵地点を一カ所に絞りこんでいた。しかも驚くべきことに、超能力者の力を借りてその場所を探り当てたというのだ。神父の知り合いの超能力者は二人。それぞれポルトガルとメキシコに住んでいた。赤城山周辺の地図と写真数枚を、二人に送って透視してもらったところ、その結果はほとんど同じようなもので、ポルトガル人のほうがより詳しかった。

「場所は赤城山の南面の中腹。雑木林の中に石積みがあり、その中央部は井戸のように地

下約五メートルまで掘り下げられている。穴の底から横穴が通じていて、十メートルほど進んだところに大量の金が埋まっている。裸の男たちがたくさん働いているようすが目に浮かぶ。どうしたことか、腰のあたりにみんなまん中が黒く汚れている。近くに女性の死体がある。爆薬が仕掛けられているので、ここを掘るときには注意が必要である」

報告するチアキも、やや興奮気味だった。声がうわずっている。

「聞いてたまった（驚いた）」

冬なのに、受話器を握りしめるぼくの手も汗ばんでいた。日本に來たこともない、ましてや日本の歴史や昔の貨幣について知識のないはずの人が、ここまで具体的に説明できるなんて。裸の男たちの腰あたりにあるＴ字形の影とは、ふんどうのことだろう。箱に入った金は大判にちがいない。形は確かに楕円形で、表には「拾両後藤」と金細工師後藤家当主の花押が墨書きされている。

最後にチアキは、東京の荒川区にも、能力的にはさほどでもないが、透視のできる外国人の神父がいるので、フラガ神父に紹介してもらおうことになっているといった。

ぼくが当人に会う機会は、その二カ月後にやってきた。所用で上京した神父と合流し、その足で荒川区の三河島にあるカトリック教会を訪ねることになった。チアキの表現力が極めて豊かなせいだろう、フラガ神父はぼくが抱いていたイメージとぴったり一致する人物だった。もちろん日本語は達者だが、ら行の音が巻き舌になるところが、スペイン人とじかに接するのが初めてのぼくには珍しかった。とくに「御用金四百万両」の「両」のところが「ルリヨウ」となると、実際より十倍も百倍も値打ちがあるように聞こえるから不思議だ。

杉並から荒川へ向かって車を走らせるフラガ神父の横顔を助手席から盗み見ながら、ぼくは鉄砲やキリスト教が伝わってきた十六世紀後半の日本を思い浮かべていた。あのころの宣教師は、たいてい鋳工業の知識と技術をもっていて、布教を進めるうえでそれが役に立ったようである。中には最初からジバンゲの黄金が目的でやって來た者もいるだろう。ぼくがイメージする四百年前の切支丹伴天連とフラガ神父は、見事にオーバーラップしていて、まるでタイムスリップしたような気分だった。しかし、それよりもなお不思議なことが待ち受けていることを、ぼくはまだ知らなかった。

三河島の教会で、フラガ神父はぼくにＢ神父を紹介してくれた。フラガ神父とほぼ同年齢で、五十歳前後だっただろうか。イタリア人で、やはり流暢な日本語を話す。ただ、二人で話すときは、日本語とスペイン語が半々になる。

古い教会の中はひんやりとしていて、ぼくたちの足音と話し声がかわいた反響をくりかえした。階上の暖房のよくきいた狭い部屋に通されたぼくは、早速天草の伝説について説明を始めた。都合のいいことに、二人とも神父だから「天草・島原の乱」の史実についてはかなりの知識があった。そこで、話は早々に切り上げて財宝の有無を透視してもらうことにした。資料を求められ、ぼくはテーブルの上にまず天草下島北部の五万分の一の地図を広げた。Ｂ神父はポケットからその「道具」を取り出した。

（これがダウジング・ロッドか）

話には聞いていたが、実物にお目にかかるのは初めてだ。一回目の発掘で使ってみた東村山市水道局仕様の金属棒が、実は同種のものなのだが、これは形状がまったく違う。

三十センチほどの糸の先に、どんぐりみたいな形のプラスチックの容器をぶら下げたものだ。「ロッド」は枝や棒のことだから、ダウジング・ロッドというよび名がはたしてあたっているかどうかわからないが、ぼくたちが使っているオカルト棒とはちがう、ほんもののオカルト探知機の総称として、その言葉が使われている。ルーツをたどると、古代エジプトの水脈占い師が使っていた柳の小枝に通じるそうで、中世のヨーロッパで、失せ物探しの道具として、いろいろな形状のものが考案されたらしい。旧ソ連でも、かつては軍事的でこの研究が行われ、生体物理学的效果法 (Biophysical Effects Method)、略して「BPE法」とよばれた。

さて、B神父は、どんぐり形の容器のふたを取り、フラガ神父の太い純金の指輪を借りてその中に入れた。そして地図の六、七センチ上方にそれをかざした。六つの目が「振子」の先に集中する。数十秒間、静寂の時間が流れた。やがて振子が動き始め、大きな往復運動に変化していった。ぼくの鼓動もそれにつれて大きくなっていく気がした。B神父がスペイン語でなにごとかつぶやく。フラガ神父は三十センチの定規と鉛筆を手に取り、振子が描く直線の軌跡を地図上に写し取った。

「ありますよ」

フラガ神父の目が光を増した。よく見ると、鉛筆の線はほぼ南北に走り、苓北町の茶屋峠付近を通過し、三角池のある窪地を貫いていた。

(まさか、そんなことがあるだろうか)

その事実を肯定するわけにも否定するわけにもいかない、何とも複雑な気持ちにおそわれた。めまいがしてきた。

「この線上にあるということですね」

ぼくはおそるおそるたずねた。二人は無言でうなずき、地図を九十度ほど回転させた。そして、いったん止めておいた振子を改めてかざす。しばらくの後、方向はちがうが振子は同じように振れ始めた。フラガ神父がまたその軌跡を地図に写す。

二本の線の交点、そこが埋蔵地ということになるわけだが、はたして「三角池」の場所と一致していた。がまんできずに、ぼくは声を上げていた。

「ぴったりです。そこですよ、ぼくらが三年も掘り続けている沼地は！」

二人とも言葉は少ないが満足げだった。

次の作業に移る。ぼくは現場でのスケッチをもとにかきあげた「三角池」全体の地図を広げた。同じ動作が繰り返され、五十年の初めから集中的に掘っている湿地の奥に×印がついた。

続いてB神父は、振子を×印の真上にかざした。すると今度は、振子は往復運動ではなく、円運動を始めた。糸を持つB神父の右手に、以前より緊張感が増したように感じられた。

「深さは一メートルから一・五メートル。財宝の重さは六十キロくらいでしょう」

そこまで具体的にいわれるとは思っていなかったうえに、数字に整合性があるので、ぼくは唖然としてしまった。その地点付近のドロの深さが、一・二メートルくらいだということは調査済みだし、財宝を隠したのは小山田慶信ひとりと考えられるから、山の中まで運ぶことのできる重量となると、六十キロぐらいが限度だからである。

実に見事というよりほかに言葉はない。ぼくはすっかり、このオカルトの世界に引き込

まれていた。B神父に会うまでは半信半疑というより、こういうことを本気で信じるわけにはいかないと思っていたのに、いつのまにかそんな気持ちはどこかに消え失せていた。ぼくはいつたいどんな表情で二人に接していたのだろう。ふだん、自分自身を客観的にみることを忘れないようにしているぼくだが、このときの自身の姿についてはどう記憶をたどっても目に浮かんでこない。また、表情をやわらげ、祝福と激励の視線を向けるフラガ神父の顔は、はつきりと網膜に焼きついていっているものの、三河島の教会を出たあと、どこで神父と別れ、どういう経路でうちに帰ったかについてはまったく記憶がない。

いずれにしろ、「天草をまだ諦めたくはない、新たな方策を仲間に提示して発掘を再開したい」と思っていたぼくにとっては、新展開を期待することのできるかっこうの材料となつた。

ちょうどこのころである。八カ月になった長女の明子めいこが、初めて言葉らしい言葉を発するようになった。しきりに「アッタ、アッタ」というのだ。

（財宝発見の予兆かな？ 現場で探知機代わりに使えるかもしれない。三角池に連れていってみよう）

ぼくは密かにそう考えていた。

ダウジング・ロッドの判定に関する情報が仲間に伝わると、第六次の発掘計画がすぐ具体化した。時期は五月の連休に照準を合わせることにした。はたして文字どおりのゴールデンウイークになるかどうか。東京からは、新しく仲間に加わった全日空パイロットの宮本憲一君みやもとけんいちと、ぼくの会社の同僚の鈴木俊男君すずきとしお、それに、赤ん坊を含むぼくの家族三人が向かうことになった。妻の充子みつこは、結婚前の五十年五月に参加しているから、二度目の天草旅行となる。

ところが、意気込む東京グループの出鼻をくじくような、ちょっとしたハプニングが起こった。新米歯医者えとうきんじの村上ユウちゃん、魚屋のオカダ、新顔の土建屋のキンちゃんこと江藤琴自君えとうきんじの三人の地元熊本グループが、東京グループの来る前に宝を出してしまえと、二週間も先行して現場に乗り込んだのだ。

チアキの報告によると、その前夜、熊本へ帰った彼を含む四人は、退屈しのぎに雀卓を囲んでいた。チアキは、ほかの三人ほど麻雀が好きではない。無理やりつきあわされたうえに、なかなかいい手もこない。うわの空で牌を打ちながら、超能力者のダウジングのことをぼそっとつぶやいたのである。

「やっぱ、三角池に財宝のあるごたるぞ」

すると、たちまち三人は凍りついた。そのとき、キンちゃんスウアンコイは四暗刻の単騎待ちをテンパっていたというが、それはたぶん話に尾ヒレがついたのだと思う。とにかくにも、麻雀どころではないと、途中でお開きにして、準備のためにそそくさと家に帰り、翌朝早く天草へ向かったのだそうだ。

その知らせを受けたとき、ぼくはさして焦った覚えはない。X地点を示す地図のコピーを熊本にも送っていたものの、どうせその地図は正確な測量をして作ったわけでもないからと、高をくくっていたのだろう。でも、もし彼らが先に掘り当てていたなら、きっと地団太を踏んで悔しがついていたにちがいない。

結果的には、二日かけても彼らは掘り当てることができなかったし、もともと悪気があ

って先行したわけではなかった。口では「東京グループより先に」というものの、実は三人ともゴールデンウィークに都合がつかず、かといって参加しないのも心残りになるからと、先乗りを敢行したのだった。

殊勝にも、三人組は発掘現場の写真を送ってきた。見覚えのある奥の湿地の中ほどに、直径一メートルくらいの穴があいている。湧き水の量が多いとみえ、地面すれすれまで泥水が溜っている。一メートルばかり掘ったが、岩盤につきあたった。これが池の底だろうという注釈がついていた。相変わらず作業が難航しそうなことは、いわれなくてもわかった。

ぼくたちが羽田を発ったのは五月一日のこと。ぼくの家族に鈴木君が同行し、宮本君は半日遅れで出発して、熊本で車を借りて追いかけてくることになっていた。実家に立ち寄ったあと、バスで天草に向かったが、こともあろうにひどい荒天となった。ちょうど前線の通過にぶつかり、生まれて初めて経験するようなものすごい豪雨に見舞われたのだ。

ふつうに走っても、本渡まで快速バスで二時間半のところを、のろのろ運転のため一時間以上はよけいにかかった。とても五橋で結ばれた天草の美しい島々を眺めるどころではない。娘の明子は車中でミルクを吐き、ぐったりとなるありさま。本渡に着いたころには雨はおさまったが、富岡まではさらにバスで一時間十分、乳児には過酷な旅だったかもしれない。やっとたどり着いた岡野屋の若奥さんとお手伝いさんが、あきれた顔をしていそいそと明子のために布団を敷いてくれた。

翌朝、天気はすっかり回復した。三角池はぼくたちが来るのを待っている。しかし、具合の悪い赤ん坊を連れて行くわけにはいかず、残念ながら、明子探知機の試用はお流れとなってしまう。ただ、たとえこのとき彼女が元氣だったとしても、役に立ったとは思えない。というのは、少しあとになって、なぜ「アッタ、アッタ」と口走っていたか、そのわけがわかったからだ。妻の充子は、家の中でよく物を置き忘れる。ろくに探もしないうちから「あれがない、これがない」とひとりで騒ぎ、本気で探すといっている。つかるものだから、「あった、あった」ということになる。その口癖が娘にうつっただけのことなのだ。

現場は思ったとおり水びたしだった。驚くことに、熊本グループが掘ったところは、地図上のポイントにぴったりといってもよい場所だった。そこで、用意したポリバケツで水をかい出しながら、穴を広げていくことにした。初参加の二人は喜々としてこの作業に取り組んだ。宮本君は操縦桿をシヨベルに、鈴木君はペンをつるはしに持ちかえての挑戦である。ぼくも含めて三人ともふだんから無口のほうなので、黙々と作業が続いた。

まる二日かけて行った六回目の発掘調査だったが、ついにこれも成果なしに終わった。金属片どころか、木片一つ出てこない。(いったいなぜなのだろう)と、不思議がるほうがおかしいのかもしれないが、ダウジングの結果が出たときには、けっこうその気にさせられて、手ぶらで帰る可能性のほうが少ないと考えていたものだから、落胆は以前にも増して大きかった。でも、結局はポイントがずれていたのだと、思い込むしかなかった。

同じ場所を掘る機会は、それから間をおかずやってきた。約一年後の昭和五十三年春、ある出版社が、その当時はやっていたムック版(雑誌と単行本の間取的な体裁の出版物)の『日本の黄金伝説』という本を出すことになり、特集として「三角池発掘ドキュメント」を掲載したいというのだ。いっさいの費用は先方から出る。ぼくは喜んで協力を引き受け

ることにした。発掘隊はぼくと阿波田時彦さん、その本の編集者とカメラマンの四人で構成された。

(ひよっとしたら)という思いが心の片隅にあったが、写真の撮影が優先で、いわゆる「やらせ」の部分がけっこうあって、しかも一日だけしか掘らなかつたから、結果は推して知るべし。ただこのとき、三角池周辺の変貌ぶりには驚いた。一つは志岐(富岡の隣の地区で同じ苓北町に属する)と本渡を結ぶ大きな農道が、茶屋峠を貫いたことである。それまでは細い山道を登り、富岡から車で小一時間かかっていたのが、わずか十五分ほどで三角池にたどりついてしまう。もう三角池は秘境ではなくなってしまったのだ。

もう一つは、荒れ放題だった茶屋峠の水の元観音に立派なお堂が建ったこと。ぼくたちは間口二間ほどの四角いお堂の中に入って二度びっくりした。壁にかかった木目も鮮やかなヒノキの板に、次のような再建の趣意がしたためられていたからだ。

「ここ水の元は、其の昔、本戸城と富岡城を結ぶ本戸往還の途中で、山の峠にもかかわらず絶えず良質の岩清水が湧き出て、この往還を通る人馬が喉を潤したところであり、又、その名の通り志岐川の水源ともいわれます。ここにいつの頃からか観音堂が建てられ、旅の安全と地域発展の守りとして、毎年旧暦七月十七日の夜から十八日にかけて、近郊近在の善男善女がお参りして盛大なお祭がありました。しかし乍ら、大東亜戦争敗戦の今日、信仰心は薄らぎ、加えて交通の不便はこのお祭もさびれ、お堂も全く見る影もなく荒廃してしまいました。この度、志岐―本渡を結ぶ広域農道が貫通し、こゝ水の元は深山の涼味を満喫しながら、近くの佛木坂古戦場や天草四郎ゆかりの伝説三角池、或いは私達の先祖が数多く通った旧往還跡などの探訪の接点として、かっこうの所となりました。この天興の機会を捉えて、私達地元志岐山区民は、かねての悲願観音堂再建を決意し、広く地域内の賛同を得て、ここに総工事費百拾万円を以て願望は達成したのであります。

昭和五十二年七月 志岐山区民一同

世話人 (五名) (注・句読点と傍点は著者による)

ぼくたちにとっても、これは一大事だった。天草四郎の財宝が目の目を見るよりも一足先に、三角池が世の中に認知されることになったのである。出し抜かれた感があった。世話人の中に、フジテレビの取材のとき、地元の古老の代表として現場に招かれた錦戸さんの名前があった。錦戸さんは「財宝はあると思いますか」との問いに答えて「さあ、海のものとも山のものとも、ここは山ですが」などとシャレを飛ばしていた明るいおじいさん。三角池が史跡の仲間入りをしたのも、きっと錦戸流のシャレなのだろう。

なお、ダウジングによる探査の機会をつくってくれたフラガ神父には、それからしばらくたつて再会した。大分県臼杵市の教会にいるときに、チアキと一緒に訪ねると、相も変わらぬ陽気さで出迎え、本場のスペイン風オムレツとワインで歓待してくれた。実は、神父は料理の名人でもあった。後に『フラガ神父の料理帳』というスペイン家庭料理のレシピ本まで出版しているほど。オムレツのうまさに感動して、天草の報告を忘れそうになったが、まだ見つからないものの、手応えは感じていると伝えた記憶がある。

そのとき、満面に笑みをたたえて、「がんばってね」と言ってくれた神父の声が、四十年以上たったいまでも耳の奥に残っている。残念なことに、それからずっと交流がなく、最近ふと気になって調べてみたら、二〇二〇年の暮れに別府市の病院で帰天されていたのを

知った。享年九十一歳。

フラガ神父は晩年、長野県の黒姫山の麓の山荘で過ごすことがあったが、そこで知り合
い意気投合したのが、母国こそちがうものの、ともに人生の大半を日本で過ごしたC・ニ
コル氏である。奇しくも、ニコル氏が七十九歳で亡くなってからおおよそ八カ月後、神父も
あとを追うように世を去った。いまごろはきつと天国で、焚き火でも囲みながら一緒にう
まい料理とワインを味わい、神父の日本語のダジャレに、ニコル氏が笑い転げていること
だろう。

一九七八（昭和五十三）年、ほんとうならば、ぼくの宝探しはそこで終わっていたはず
である。

なぜ継続することになったか、その理由は次の章を読んでいただけばわかっていただ
けるのだが、実は天草も、完全にピリオドを打ったわけではない。その後もチャレンジす
る機会が三度あった。二〇〇一年の二月と八月、二〇一一年の七月、そして二〇二〇年三
月である。いずれもテレビ番組の企画に合わせた発掘調査だった。昔は手配できなかった
高性能の金属探知機なども持ち込んで、財宝が実在するならば必ず検知できるはずと意気込
んだが、湿地の水量が多かったりして、なかなか計画通りにはいかず、決着はつけられな
いまま今日に至っている。

ここのところは、我が家のある東京からのアクセスがラクな、関東周辺のターゲットを
追いつめていたので、天草は棚上げしたままだが、最近になってあつと驚いたことがある。
グーグル・アースの航空写真で現地を見ていたときのこと、地図上の目標であるオレンジ
ロード沿いの水之元観音堂のすぐ北に、くっきりと三角形の窪地が存在していることに気
づいたのだ。まさしくそこが三角池。国土地理院の地形図ではわからないが、航空写真で
は大きく育った周りの木々と、草しか生えない湿地とのコントラストが、このような像を
結ぶのだ。

三角池にはまだ手をつけていない部分がけっこうある。それがますます気になって、と
きどき夢の中にも出てくる。黄金の十字架の幻影がちら
つくとともに、遠くから「ワンワン」と犬の鳴き声が聞
こえてくるような気がする。あれはポチだろうか？ 第
一回の発掘のときに用意したぬいぐるみの犬は、熊本の実家
に置いてきた。実家は三十年以上前に解体し、そこ
には新しい道路が走っているから、とつくに消滅したは
ず。となると、ぼくの心の中にすみついているポチが、
声を上げるのだろう。その声がやまないうちは、まだ三
角池を諦めるわけにはいかない。

2011年と2020年には高性能の探知機を持ち込んで調査



くっきりと三角形の窪地の存在がわかる航空写真 (Google Earth)

